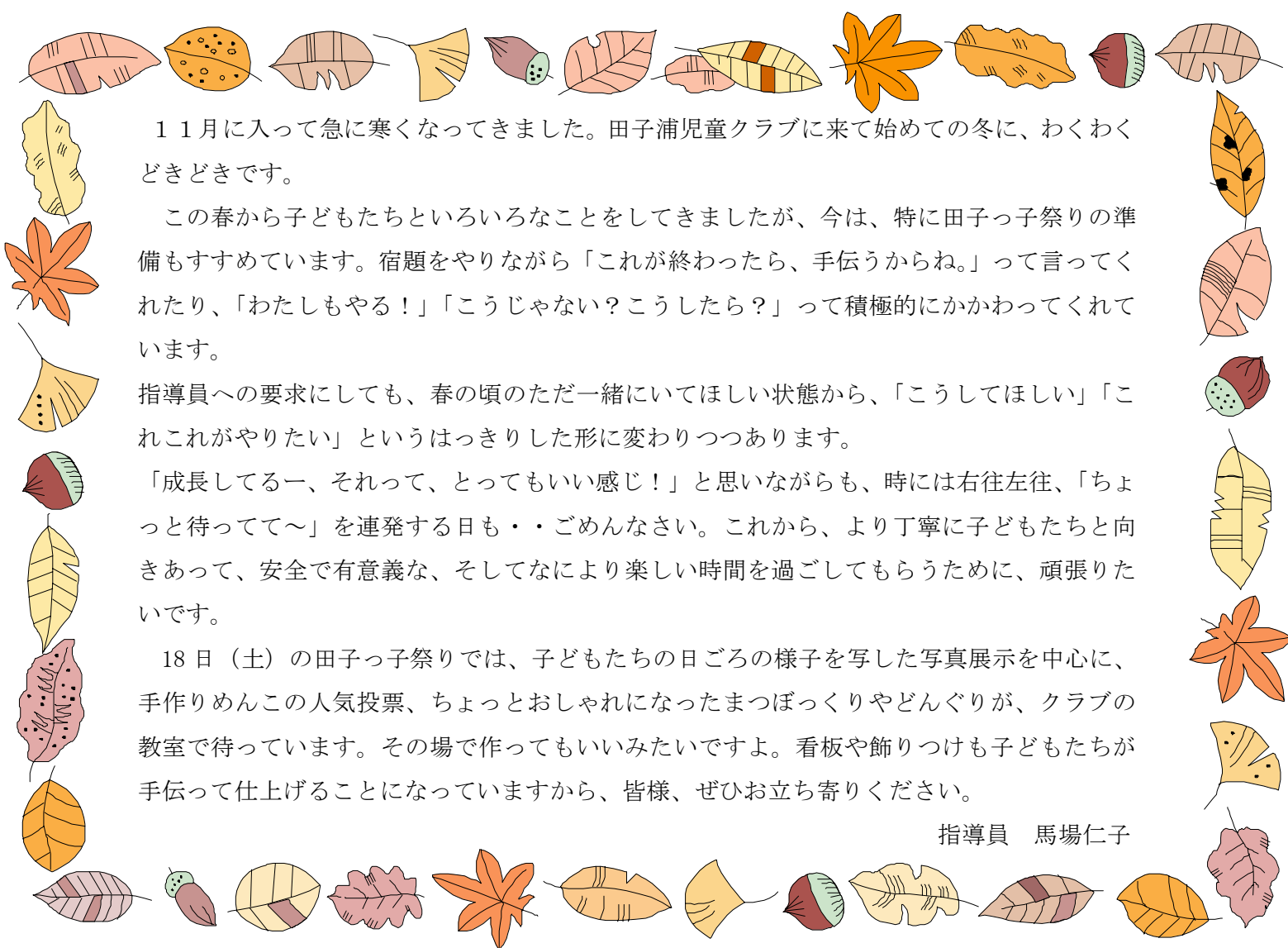


たごうら児童クラブだより

秋の増刊号



18. 11. 11



11月に入って急に寒くなってきました。田子浦児童クラブに来て初めての冬に、わくわくどきどきです。

この春から子どもたちといろいろなことをしてきましたが、今は、特に田子っ子祭りの準備もすすめています。宿題をやりながら「これが終わったら、手伝うからね。」って言うてくれたり、「わたしもやる!」「こうじゃない? こうしたら?」って積極的にかかわってくれています。

指導員への要求にしても、春の頃のただ一緒にいてほしい状態から、「こうしてほしい」「これこれやりたい」というはっきりした形に変わりつつあります。

「成長してるー、それって、とってもいい感じ!」と思いながらも、時には右往左往、「ちょっと待ってて〜」を連発する日も・・ごめんなさい。これから、より丁寧に子どもたちと向きあって、安全で有意義な、そしてなにより楽しい時間を過ごしてもらうために、頑張りたいです。

18日(土)の田子っ子祭りでは、子どもたちの日ごろの様子を写した写真展示を中心に、手作りめんこの人気投票、ちょっとおしゃれになったまつぼっくりやどんぐりが、クラブの教室で待っています。その場で作ってもいいみたいです。看板や飾りつけも子どもたちが手伝って仕上げることになっていますから、皆様、ぜひお立ち寄りください。

指導員 馬場仁子

「うんとこしょ、どっこいしょ」

お芋のつると一緒に出てきたのは、子ネズミのしっぽ。「わー。つかまえよう!」子ども達は、大騒ぎです。

「病気でも持っていたら…。クラブへ持って帰らないでー」という指導員の心配をよそに、子ども達は、子ネズミのしっぽを捕まえるとスーパー袋の中に押し込んでしまいました。

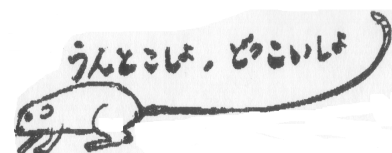
10月の中旬から、7〜8人ずつ希望者をまとめて、さつま芋掘りに連れて行きました。初めは「付いて行くだけ。」と言っていた子も一人一株だからと言って掘らせると、自分の分だけでは、物足りず、クラブの分も掘ってくれました。大根のようなお芋を掘れた子、小さいのを7〜8個も掘れた子と当たりはずれはありましたが、どの子もずっしりとしたスーパー袋を手にも満足したようでした。

クラブでもおやつに大学芋にしてみました。自分達で掘ったお芋だからか普段あまり食べない子もおかわりをしてくれて嬉しかったです。来年は、少しでも苗の植え付けを体験させてあげたいと思います。

P. S.

ちなみに、持って帰ると言われて心配したネズミは、公園で遊んでいるうちにどこかへ忘れてしまったようで、ホッとしました。

指導員 大村千穂



たごうら児童クラブは

働くお父さん・お母さんの子育てを、応援・支援します

18/11/11 文責 主任指導員 瀧元



★ おばあちゃんの背中

私が幼少の時代は、高度成長期で、しかも我が家は商店街。どこの家も両親は土日関係なく働いていて、毎日暗くなるまで近所の子たちと遊んでいました。家に帰ると必ずおばあちゃんがいて、よくおんぶしてもらったのを覚えています。

ひざっこぞうを擦りむいて、いたいよーというのと、「いたいよねー♪ーいたいよねー♪」とおぶさる私の耳元で歌うおばあちゃん。お母さんまだ帰って来ない、と言うと、「帰って来ないねえ♪帰って来ないねえ♪」またへんなメロディで歌うのです。それだけで気持ちよかったです。おばあちゃんの背中は大好きでした。

今のカウンセリング手法でいえば、相手の気持ちを受け取る「聞きっぱなし、オウム返し」です。ちなみに、昔から「呑み屋のおかみ」と言われる人も、悲しいサラリーマンのカウンセラーをやっているわけです。

児童クラブは、子どもたちにとって「おばあちゃんの背中」だと思えるのです。子どもたちの心の居場所。親のように責任もってしつれたり、先生のように責任持って勉強をみたりは出来ません。指導員は、どちらでもない普通の大人として、普通に傍らにいて見守ります。そして、求めてきた子どもたちに寄り添い、いつも心地よいおばあちゃんの背中、安心の居場所にしたいと願っています。

★ はだかのおうさま

皆さんは、アンデルセンの「はだかの王様」という童話をごぞんじでしょうか？その町の大人たちは、自分が馬鹿だと思われたくない一心から、本当のことが言えないのです。本当のことが見えないのです。けれども、とうとう正直な子どもが叫びます。「王様は、服なんて着てないよ。はだかだよ！」

毎日報道でいじめのことが騒がれているさなか、ふと、この童話を思い出しました。私の子どもの頃と大きく違うのは、今の時代は、普通なら正直に表現できる「子ども」であるはずの子どもたちが、子どもでいられない。子どもなのに、本当のことをあたりまえに言うことが出来ない、そんな時代なのだ、ということです。

もし、誰かが、正直に言おうものなら、こんどはその子をターゲットにして新たないじめが起きてしまう。真実を見ようとしないうほうがいい。いいえ、見ても、言葉にしないほうが身のため。本当のことを言ったら最後、こんどは自分が仲間はずれになる。こんなピリピリした毎日を、子どもたちは過ごしているのです。信じられないかもしれませんが、低学年でも現実には起こっています。私たち指導員は、こういう子どもの現状を、彼らの日常の言葉からよく聞いています。いじめに遭うということは、地雷を踏むようなものだ、とある中学生はしみじみと表現していました。本当のことが言えないクラスの一員として、毎日、その場の空気を察知しながら、気をつけながら生活している、これが今の子どもたちの人間関係の実情です。

昔は、はだかの王様の例でわかるように、大人社会がそうだったのでした。それが、いまは、大人だけでなく子ども社会もそうってしまったのです。

「王様は、服なんて着てないよ。はだかだよ！」子どもたちがもはや言えなくなったとしたなら、私たち大人はもう一度考え直さなくてははいけないのでは…。切実に思います。

「仮面はやめよう、なんでも正直に声に出していこうよ。」私は、子どもにも大人にも、少なくとも正直でわかりやすいクラブでありたいと、心から願っています。



★ こだわり

大人目から見て、こだわる子、物事に臨機応変に適應できない子がいます。ご両親は、うちの子はすぐに言うことを聞かない。わがままだ。不器用なのかしら。ほかの子に比べ成長がおそいのじゃないかしら？親や先生に怒られてばかり、うまく立ち回れず、人とトラブルが起きやすいために、とにかく「悪い子」というレッテルを貼られやすいタイプです。

でも、私たち指導員目から見ると、そうばかりではありません。これが「子ども」だと思うのです。子どもは「なぜ？どうして？」と言うのが商売。「学ぶ」ことが大好きです。スポンジみたいに吸収するのは、子どもだからこそです。「こだわり」をもつことは、そこで立ち止まるということです。もっとわかるまでに少し時間が欲しいというサインなのかも。こだわりは、「学びの原点」ではないでしょうか。「なぜ？どうして？」子どもの特許みたいなことばです。「どうしてお空は青いの？どうして雨がふるの？」大人になるとばかばかしくて、もうあまり言いませんよね。でも…。これに正しく答えられる大人も、実は少ないのです。

子どもたちが、こだわる時、納得がいかず、もがいている時、体が止まってしまった時、彼らは、何かを考えている最中か、これから考えようとしているのです。学ぼうとしているのです。

私たちは、この大切なチャンスを大事にしてあげようと思います。クラブの生活で、一人の子どもが、臨機応変にすぐ適應できない場面に出くわすと、よく私たちは、大切な言葉を一言ぐらい与えるだけで、あとはガミガミ言わず、そうっとしておきます。子どもたちが、静かに考える時間を保障したい、そして、考えたあと、「気持ち」がそこまで追いついていくために必要な時間をも、十分保障してあげたいと思っています。

やがて子どもたちは、それぞれに必要なだった時間を消化すると、私たちのもとに戻ってきます。おやつタイムであったり、おにごっこに「入れて！」だったりします。また、「ちょっと来て！あのときはね…ほんとうはね」と呼ばれて、振り返ったあとの今の気持ちを、そっと話してくれたりもします。

これが、指導員にとって一番嬉しい瞬間です。

毎日働いているお父さんお母さんへ ～お願い～

★ 子育ての失敗？

どこでもよく聞く話ですが。すぐに宿題をしない、何度言っても部屋を散らかす。片付けをしない。すぐけんかをする。うちの子どうしたら良いのでしょうか。

とかく、トラブルがおきると、親は、自分の育て方が悪かったのじゃないか、私の子育て失敗？悪い子にしてしまったの？と、不安になってくると思います。

私はいつも、こういうお母さんやお父さんに、声を大にして言い続けています。「子育てに、失敗なんて、また、成功なんて言葉はない」と。だって、結果はまだ誰もわからないし、今かろうじて見える結果でさえも、はたして、本当に将来に備えての大事な事柄になり得るのでしょうか？

むしろ、大切なのは、そこまでに至る過程を、親がどう子どもと過ごすか？ではないでしょうか。

ぜひ皆さんには、いろいろな情報にあまり振り回されないでほしいのです。ときに、「何歳までにこうしないと間に合わない」「あなたの子育てが手遅れにならないために」などといった脅しタイトル商法には、冷静でドライな目を持ってほしいです。

いったい誰が、そんなたいそうなことをあなたに言っているのか？その人の言う成功とは何のことなのかを、よく確かめてみてください。

ある人がお金がない生活をしていても、十分な食べ物や住む家がなくても、本人が「ああ幸せだ」と感じているなら、誰が不幸だと言えるでしょう。周りが不幸そうだなあと思えても、当の本人が幸せなら、それでいいのです。この種のものは、ものの見方次第。はたして本人がどう感じているか、だけの問題なのです。

子育てもそれと似ているのではないのでしょうか。当事者の問題。結果が周りの人たちにどう見えようが、関係ないことです。子育てする過程、日々の歩みのなかに、子どもと親が、楽しいことや悲しいことや悔しいこと、さまざまなことを一緒に経験して、一緒に感じて、一緒に乗り越えて、あるいは一緒に引き返して、一緒にどこかに逃げこんで、それだけでいいのです。子どもと共に歩む、かけがえのない貴重な時間。人生が二度経験できないのとおなじ。子育てそのものが、計り知れない貴重な時間なのですよね。

そういう時間は、一生のうちでほんのわずかでしかないことを、「子育て」がやがて過ぎようとしている多くの親たち（指導員も？）は、気がついているのです。そして、実は、成功も失敗もそんなものはなかった、ただあのときは、なにもわからなくて夢中だったけど、楽しかったなあ、かわいかったなあ、と振り返るのです。

考えてもみてください。子どもにしてみたら、「あなたは失敗作よ」なんて、そんな失礼で心を傷つける言葉はありません。

ぜひごいっしょに、これからもゆったりと子育てを楽しもうではありませんか。



★「本当は…」の気持ち

子どもの周りにいる大人が、物事の外に見える部分＝「表面」ばかり見ていると、子どもは本当の心を隠すようになるといいます。彼らは「大人は結果を出さないとだめだと言う。どうせ、それまでの苦労や失敗したときのつらい気持ちはわかってもらえない、見ていてはくれない。無駄だ。」と思うようになるのです。

人のところには「表」と「裏」ありますよね。大義といわれるもの。本当は〇〇するべきだ。そうした方がいいにきまっている。正しいのがいい。成功するのがいい。上手なのがいい。いい点数のほうがいい。そう、誰でもそんなことわかっているんだよ！と叫びたくなるようなことです。

でも…。正直に言えば、私をはじめ皆さんも痛いほどご存知でしょう。そんなに現実には上手いかわからないわけで。実際自分はわがままだし、そう上手く出来ないのもわかっている。それに怠け心がでると、もうやりたくない気持ちを簡単に抑えられない。面倒なことは嫌いだ。わかっちゃいるんだけど、できないんだよー。そうは問屋が卸さないんだよー。こんなふうな「裏」の気持ち、誰にも知られたくない本音があります。人間ならだれにでも、弱い部分があります。大人にもあるのだから当然子どもにもあります。認めたくないけど、そうしてしまう自分がいます。大人は子どもみたいにしっぽを出さず、上手に隠しているだけ。普通は正直になれば、誰にでもある「気持ち」です。

子どもにかかわる大人が、常にこのところを「表がいい、裏は悪い」そういった短絡的な見方で指導していると、本当の心・本音＝裏の部分で、子どもは悪いことだと考え、自分でなんとか処分しなくっちゃいけないと考えるようになっていきます。抹殺しないとこまる。あつてはならない。もし出てきたら、けっして人に見せてはいけない。誰にも話せない。親にも友達にも。自分が悪い、自分が弱いのは十分わかっている。誰かに相談したり、知られたりしたら、叱られるだけのこと。特に親や先生には言わない。おまえが悪いと言われるだけなもの。「あなたの努力が足りない、もっと頑張りなさい。」そう言われるのがおち。事態は何も変わりはないから。だからもう、大人にはけっして相談しないよ。誰にも言わないよ。

誰にも相談しないから、どんどん落込んで、せまーい気持ちになっていきます。出口がますますなくなり、とうとう八方ふさがりとなっていくのです。





実際、大人になってしまえばそんなに追いつめなくてもねー、ってこと分かりますよね。普通、人には、分かっちゃいるけどやめられない、知っているけど出来ないんだよ。そういう部分が、うざったいほど、あるんだよってことぐらい。

そうです。大人になりさえすれば、家族も出て、自分の親とはある程度距離を置けるし、今度は私が親になったのだから、自分を注意するようになうるさい人がいないわけで…。けっこうマイペースでいけるのです。私も幾年か前、結婚して家庭を持ち、責任も重いけれど、うるさかった親を離れてほっとした気持ち、自由になった開放感を味わったのを、しっかり覚えています。

皆さんも、自分の子ども時代を思い出してみてください。毎日、あーだこーだと言われ続け、逃げ道がない感じ。いつでもどこでも、もっともっと、と言われて。早く宿題のない大人になりたいな、なんて思ったこと、ありませんでしたか？

クラブで指導員をやっていると、ときどき逃げ場がないと感じている子どもの心が手に取るようにわかるのです。それで、私たちは、彼らの心の居場所になってあげたいなと、思うようになるのです。おんぶして背中を貸すおばあちゃんみたいに、なってあげたくなるのです。

そこでぜひ、保護者の皆さんに、お願いがあります。ご家庭でも、裏の部分の「子どもの本音」「そのままの気持ち」を、大切にしておいて欲しい、言わせてあげたり、表現させてあげたり、ただ、うんうん聴くだけでいいです、子どもの気持ちに寄り添ってあげて欲しいのです。「そうだねーいやだったね。」

オウム返しのように、ただ、同じ言葉を繰り返してあげるだけでかまいません。

お母さんだってお父さんだって、あなたと同じ。子どもの頃そうだったんだよ。今でもそうなんだよ。

弱い所を我が子に見せないのではなくって、人には弱い自分もあって、それで、なんとか生きてるってことを、正直に子どもに見せて欲しいのです。ぜひ、失敗談もたくさん話してあげてください。子どもたちはこういうのが大好き。何度でも、そして同じ話でも聞きたがります。親子の会話は、お父さんお母さんの子ども時代の失敗談からはじまる、と言っても過言ではないくらいです。家庭の会話を盛り上げたいんだけど、話すことがないなあと思っているお父さん！ぜひ実験してみてください。おすすめです。くれぐれも、自慢ではないですよ。失敗談ですよ。

大人だって、本当は自分の弱い部分を十分知っている。情けなくて、人に知られたくない部分なんか誰にでもある。上手くいかない時には、いじけたり、すねてみたり、抵抗したり、怒って開き直ったり、誰かに相談したり、夫や妻に甘えてみたり。

「時々お前達にもあたってしまったって、ごめんなあ」の一言ぐらい、言ってあげてくださいな。大人は、カラオケやったり、飲み会して、弱い自分ともけっこう気長につきあってくれる気楽な友達と朝まで話したりもして。そうやってどこかで上手に流しながら、毎日生きているわけでしょう。

ぜひ、子どもにもそういう流し方を、流せる場所を、ありったけ教えてやって欲しいのです。のんびりしてちょっとだらしない時間も大切だってこと、余裕も大事なこと、忘れないで、教えてあげてください。車のブレーキにも「遊び」が必要でしたよね。

意外にそういうことを教えてくれる大人は、いないんですよ、子どもの周りに。いつもがんばれがんばればっかりが、やたらうるさく聞こえてくるのです。



★良心を育む

今、多くの子どもたちは逃げ道を失い、それがストレスとなっているのです。大人の前では常に頑張ってみせないと、自分の存在を認めてもらえない。情けない自分を見せたら、きっと親はがっかりして、ボクのことを産まなければ良かったなんて考えるだろう。期待する親を悲しませたくない、怒られたくない、そんなふうにいる子どもが、なんと多いことか。彼らは、常に自分に自信がなくて、「どうせボクなんか…」と自分をいじめることばを、吐き出します。自分を大事にしないとは、そういうことです。

また、他人をいじめます。自分よりも弱く、出来ないと思う人を選んで、ストレス解消の材料にするのです。自分がこれ以上頑張れないので、今度は周りを低くして、差を付けよう、落としてやろうと思う、そうすれば自分が高くなる。もちろん、そうしちゃいけないと分かっているから、大人に隠れてやります。

悪いことだとわかっていてやります。ストレス解消の方法を教えてもらってないから、だからそうするしかないのです。やらないとバランスがとれないからです。ある意味健康的な生体反応です。

もうお分かりでしょう。私たち大人が、偉そうなことばかり、大義名分ばかりとなえて、弱い自分自身を子どもに見せないで、隠しているからいけないのです。ときには、気がつかないうちに、大人が弱い子どもを、言えない子どもをストレス解消の材料にしてしまうことだってあるのです。こういうとき、不思議に子どもは見抜いています。敢えて、反論しません。無駄だから、もうそういうのに慣れていていると言います。彼らのほうがずっと賢いのです。大人が自分の弱い部分、失敗する部分を恥ずかしいと思って隠すようになれば、子どもだってもう隠すしかない。評価してもらえないのなら、おわり、です。

生まれたばかりの赤ちゃんは、なにかを頑張っているから価値があるのでしょうか？いいえ、私たちが親になったその瞬間、そうでした、覚えています。

「ああ生きてる！すごいよ、呼吸している！」小さな命の誕生の不思議さに、深く深く感動したのです。

おなじみの昔話や童話には、必ずとっていいほど「良い人」と「悪い人」、あるいは、「良い心」と「悪い心」が出てきます。また、小さい頃からなじんでいるテレビアニメや戦隊モノにも、人間には良い心と悪い心があり、その二つが葛藤しながら、最終的に良い心が勝って、幸せになる。平和になる。こんな結末が、ベタな話となっています。

私たちはこういう単純で純粋なストーリーを通して、人の道というもの、道徳心、良心、倫理観などを学んでいきます。学ぶはずですが。

ところが、クラブで子どもたちと接していると、よく、驚かされることがあります。

「自分の胸にきいてみ？心が痛くならない？」

「○○ちゃんの中の良い心に話しかけているんだけどなあ…」

という投げかけをしても、キョトンとしているのです。本当に何のことを言われているのか、分からないのです。3年生になっても、こういうことがあるのです。

物事が自分にとって損か得か？それだったら、ほとんどの子がすぐ理解し反応します。むしろ早すぎる、多すぎるほどです。でも、小学生になれば、損得ばかりではなく、正しいことをしたい、良いことをしたいと願う、良心や道徳心が自然に芽生えてきて良いはず。そういった行動場面が増えてきて良いはずですが。

私たち指導員は、クラブにいる子どもたちを、自分の手で育ててきたわけではないので、このところについては、実はどんなに教育しようとしても、限界があるのです。「人の道」に関することです。はっきり言えば、今まで育ててきた家庭の価値観そのものなのです。

ぜひ、ご家庭で「人の道」についてのこと、丁寧に丁寧に育んでいただきたいと思います。



私たち指導員は、ことある機会ごとに、子どもたちに対し、それぞれ個性ある言葉で、彼らの良心をくすぐろう、魂になんとか響かせよう、と日々努力しています。ことばがけ、かわり方など工夫もしながら、指導員会や研修を通して、学びを積み重ねています。

でも、実際に、皆さんのご家庭に倫理観というベースがないと、どう伝えていいか本当に悩んでしまうのです。からまわりするだけなのです。

結局、子どもの行動を矯正しようとして、彼らを大声で叱って脅してみたり、怖がらせて言うことを聞かせても、なんの意味もありません。それどころか、日々積み重ねてきた、子どもとの信頼関係こそ、ゆらいでしまいかねないのです。指導員は先生のように権限もないし親でもないのです。子どもにとっては、ただ「あんた私のなんなのよ」です。

クラブに「怖い人」がいない状態で子どもが言うことを聞かない場合、よくやる指導として、誰かが「怖い人」を演じ、大声を出して威圧し勢いよくクラブ内を治めていこうとするありがちな手があります。指導する側は、とても楽です。指導員も少なくてすみます。でも、私たちたごうら児童クラブはたとえ大変でもこの方法を選択しません。「自分の意志で行動する自立した子ども」を育むことこそ、本来の大切な目的なのですから。ここは、けしてぶれません。

指導員は、これからも、出来る限り、働くお父さんとお母さんの子育てを、応援し支援し続けます。そのうえで、大切なことをぜひもう一度、押さえていただきたいのです。

子どもを育てるのは、私たち指導員ではなく、ご両親である皆さん御自身なのだという事です。

そのためには、ぜひ、それぞれのご家庭で、ご夫婦で、子育ての支柱をひとつひとつ丁寧に築いていく作業を続けて欲しいのです。私たちも、皆さんを支援し応援しながら、子どもの心に届くような気づきを与えていけるよう、これからも励んでいくつもりです。

「〇〇くんの中の良い心に話しかけているの。」「本当は悪いことって分かっていたのにね。残念だったなあ。でも今度はきっと出来るよ。応援してるよ。」子どもたちの表面ではなく、子どもたちの魂に届くような関わり方をこれからもしていきたいと心より願っております。

子ども達はパワー「力」を求めています。でもそれはけっして見せかけの強がり、力任せの支配力ではないと伝えたい。本当に求められ必要なものは、子ども自身がこれから生きていくための「力の源」なのです。これこそは、お父さんお母さんのハートから始まり、毎日の中で積み重ねられ育まれていくものだと思います。私たちは、それをこれからもお手伝いし続けます。

皆さんより少し前を歩いて子育てを経験している指導員にとって、子育ての悩み苦しきは、けして人ごとではありません。ある意味で私たち自身の反省でもあるのです。いつも皆さんの声に耳を傾ける姿勢でいますので、お気軽に、なんでもお話してくださいね。

これからもどうぞ、よろしく願いいたします。